

昭和59年編

- 1 1984年2月7日 新日本プロレス 蔵前国技館大会
アントニオ猪木対バッドニュース・アレン
藤波辰己対ラッシャー木村
ダイナマイト・キッド対デービーボーイ・スミス対コブラ（巴戦）
藤原嘉明対アニマル浜口
長州 谷津対ハルク・ホーガン マイク・シャープ・ジュニア

「地獄のプロレス」などという物騒なタイトルを東スポにつけられた大会。日本人抗争は昏迷を極め、この前週の札幌大会で「テロリスト事件」が勃発する。混乱はカード編成にもおよび蔵前大会と翌日の大阪府立体育館大会は当日になってもカード変更が相次いだ。その影響か、シリーズ前半に登場したブッチャーやローデス、この日登場したハルク・ホーガンははっきりいってどうでもいい存在であった。

で、この日のカード変更は当時の維新軍が“テロリスト”藤原をだせ、と新日サイドに要求したとかで急遽、藤原が出場し維新軍の参謀格、アニマル浜口とシングル戦を行うというもの。乱入事件を起したとはいえ、藤原はまだ単なる前座レスラー。寺西あたりならともかく、立派なメインエンター浜口がわざわざ出てくるとは維新軍も大人げないなあ、と思っていたら、おそらくこの日から藤原のランクアップが実行されたのだろう、まったく互角のラフファイトの末に、浜口の反則負け。つまり藤原は負けなかったのである。ちなみにUWF的なグラウンドの動きは皆無であった。

ジュニアの巴戦はやや遅れた正月の盛りだくさんなおせち。逆にこれ以降見るものはなくなった。

そしてこの後1年で新日は壊滅寸前にまでいくことになろうとは、千里眼でも予測はできなかった。

- 2 1984年2月23日 全日本プロレス 蔵前国技館大会
ジャンボ鶴田対ニック・ボックウィンクル（AWA世界戦）
天龍対リッキー・スティムボード（UN決定戦）
越中詩郎対三沢光晴

なんとこの日は日テレで特番が組まれるという豪華版。このころ「特番の鶴田」など

ということばもあったほどで、特にこの日は鶴田が日本人初のAWA世界王座獲得か、という気運が高まっていた。

アメリカのメジャータイトルを獲得するなどということはレスラーの実力のほかにもバックにつくプロモーターの資金力、政治力も問われるもの。まあ所詮日テレの金とはいえ馬場は帝王ガニアにいったいいくらボンド金を払ったんだろう。

試合は特別づくしで、アナウンサーの徳光さんやらレフリーのテリーファンクにまで見せ場が用意されていた。

UN決定戦については、直前にチャンピオンのデビット・フォン・エリックが死去するアクシデントよりも、当時の短い観戦経験のなかで早くも2回目となる「UN王座決定戦」に対する不思議な因縁を感じた。

ところで事前のカード発表にはなかったボーナスマッチが、国技館初公開の人気カード三沢対越中であった。今にして思えばあんなグラウンドのムーブ皆無な試合をよく鉄人テーズが絶賛したものだ。まあ鉄人は最近ではキラーなんたらという戦前の日本人レスラーも誉めているコメントも発掘されたいからあまり一環したポリシーが実はなかった人だったのかもしれない。

3 1984年3月24日 全日本プロレス 蔵前国技館大会

ジャイアント馬場対スタン・ハンセン

ジャンボ鶴田対ニック・ボックウィンクル

天龍対テッド・デビウス

またも特番。なぜかこの頃の全日の巻き返しに日テレも積極支援体制だった。それが新日からさらにさらに大量の選手引き抜きにつながるとはこの時点では予想できなかった。

意外にも馬場単独メインの興行はこの日が初観戦。平成の三沢メインの興行の前座で6人タッグやってた馬場しか知らない世代には想像不可能だろうな、馬場のシングルメインの興行って。PWF王座をめぐるハンセンとの抗争は当初の馬場絶対不利の予想を覆した互角の試合連発で当時の観客に大いに受けていた。

鶴田対ニックは前回とは攻守を変えて鶴田がAWAチャンピオン。これも完全決着あたりまえの現代では想像できないだろうが、結末は鶴田の反則負け。ところがAWAルールで鶴田の防衛なので館内大喜び。そりゃそうだ、さんざんこの手に鶴田は泣かされてきたわけで、ファンも知ってた。

まあ今にして思えば当時プロレスの世界チャンピオンというものは反則負けか時間切れに持ち込んで逃げ切るのが上等手段だったわけだ。

- 4 1984年7月31日 全日本プロレス 蔵前国技館大会
ジャイアント馬場対スタン・ハンセン
ジャンボ鶴田対リック・マーテル

「難民救済チャリティープロレス」のサブタイトルがついたこの大会。
また全日としては最後の蔵前興行になり、この後からは両国国技館の時代になる。
ボランティア団体への寄付贈呈の場面もお約束。また全日版タイガーマスクのリング
お披露目もあり、なかなか2大マッチが始まらず暑苦しい日であった。

鶴田はこの時点ではAWAタイトルを奪回されており、この日がリターンマッチ。
格ドマーテルに調子を合わせた両者リングアウトはいただけなかった。

馬場対ハンセンは毎度毎度の肉弾戦。16文キックも晩年のようなロープにもたれて
いるところに永源が自分からぶつかっていくやつじゃなく、馬場がリング中央で片足
あげているところにハンセンが全速力で走り込んでくる、見るからに豪快なバージョ
ン。

たしか32文も出たような気がする。32文ドロップキック！そうです、馬場がドロ
ップキックやってた時代があるんですよ、平成のデルフィンちゃん達。

- 5 1984年8月23日 全日本プロレス 田園コロシウム大会
ジャイアント馬場 ドリー・ファンク・Jr対ハンセン プロディ
タイガーマスク対ラ・フィエラ

なんといっても全日に二代目タイガーマスクが出場した日、つまり現在のノア社長
三沢光晴がメインエバンターに格上げされた記念日。千里眼はこの頃、大学の先輩と
全日観戦が何度かありこの日もそう。そういやあの人今頃なにしてるかなあ。

水面下では全日が新日から大量に選手を引き抜こうとしていたころでそれが一気に
表面化して大事件の渦中の観戦がこの次の最強タッグの後楽園。
そのせいか、今にして思えばずいぶんおとなしい大会であったかもしれない。

6 1984年12月 全日本プロレス 後楽園ホール大会

S・ハンセン B・プロディ対H・レイス N・ボックウィンクル
ザ・ファンクス対D・キッド D・スミス

大会直前にキッド、スミスのコンビが新日離脱で電撃の全日参戦。馬場のパートナーXはラッシャー木村に決定。テリーファンクの復活。そして長州軍団の全日参戦問題。

これだけのことが一気に起こったわけだから、もう大混乱であった。

そして実際の試合で渦中のレスラー達が絡んでくる第一弾としてこの日行われたのがファンクス対カルガリーコンビ。新日スタイルとNWAスタイルははたして噛み合うのか、千里眼は興味深々で後楽園に出動であった。

試合開始直後は早いペースで試合を進めようとするキッド組に対して「せわしい奴等だ」といった表情のドリー。まったくペースを合わせようとしなければかりか、「どうせ爺は俺達にはついてこれねえだろう」という表情のキッド。事件は起こった。

ドリーが踵でキッドの顔面にストーンピングを入れたのだ。一発で鼻血まみれになるキッド。その後必要以上にロープワークを連発するドリー。つまりキッドの呼吸を乱してた訳だ。目にみえて動きが悪くなるキッド。後はドリーペースの試合を淡々とこなすだけ。リングアウトというキズの付かない勝ちかたで試合は終わった。

同行した同級生にこの後の飲み会で千里眼は得意げにこのことを解説しまくった覚えアリ。

そういえば長州軍は乱入してこなかったなあ。ハンセン・プロディ対レイス・ニックの超豪華タッグ戦の記憶がないなあ。

全てはドリーファンクジュニアの踵ストーンピングで消し飛んだわけだ。